エ！　ほんとう？（三）

編集部

会員の皆様の素晴らしい、面白い、貴重な体験や珍しい偶然の出合い、また裏話をご披露願う場所です。

今回は、十八回生の**片山章氏**より
september 11、2001
アメリカ、NYで遭遇した出来事

十八回生の**小木曽（名田）文子様**より
新島八重さん

二十七回生の**萩原直大氏**より
私の2001, 9, 11 の謎　と
赤レンガの東京駅に三か月寝起き
の四篇を紹介させて頂きます。

September 11 2001
アメリカ、NYで遭遇した出来事

十八回生　片山　章

この日は、晴天、雲一つ無い穏やかな朝でした。私は、早朝、6時に、カナダのオタワ空港を出発しマンハンタンの摩天楼を左に見て、着陸態勢でイーストリバーの上を、市内から15kmの、ラ・ガーデイ1ア空港に向かい、8時20分に到着しました。

勿論、25分後に、直前に見たWorld Trade Center（WTC）のTWIN TOWERに惨劇が起こるとは夢想だにしませんでした。

その後、空港からタクシーでマンハッタンに入る直前の橋からダウンタウンを見ると、WTCから黒い煙が噴き出しているのが見えました。運転手に聞くと、火事らしいよと言うので聞き流し、料金所に着くとすでにただならぬ雰囲気でパトカーが無数に並び、検問

と同時に、マンハッタンから出る方は封鎖していました。入る方も封鎖直前で、車から降ろされホールドアップで、後ろ向きに一列に並ばされ検問を受けている最中に封鎖されました。ここは、アメリカなので殺されることは無いと確信していましたが、初体験の人は既に放心状態でした。

やっと、解放され7番街のHILTON HOTELに到着し、Check in 後、ロビーで、人だかりのテレビを見てやっと事態が把握できました。その直後、2番機のテロが突入し、間もなく、あの巨大なTOWIN TOWERが崩落していくのを見て唖然とし、このアメリカで、あのNYのランドマークが？　と、現実とは信じられず、夢ではないかと立ちつくしました。

居合わせた何百人のアメリカの人々は、全員、大声を上げて泣き崩れていました。

まもなく、無機質のテレビ画面にテロップが流れ、テロ攻撃であること。ビン・ラデインが首謀者ということも流れました。

この一連の流れは、私の拙い文章より写真を見て頂くのが、なによりも事実の重さ、重大さ、テロの罪のない人への許されない非道さがよくご理解頂けると思います。（注　写真を文章の後ろに掲載しております）

でも、私には、過去に遭遇した出来事と重なり既視感がありました。私の年代は、海外進出の始まりに合致し、エコノミックアニマルの尖兵として、NOが許されない時代でした。海外への化学プラント輸出建設の黎明期を担当しましたが、仕事毎に、人種、言葉、文化、習慣の違う国に行き、それこそ道無き道の暗闇を手探りで歩いていました。その途上で、中国の文化革命の大混乱期での不安定な恐怖、思想教育の強烈さ。アルジェリアでの7年間、イスラム原理主義の精鋭部隊の訓練所近辺でのLPGガスプラント建設の危険さ。アメリカでもベトナム戦争時代、若者が先が見えずに荒れ、NYで暗闇の横町からビール瓶の底を割ったものがよく飛んできた大都会の怖さ。種類は変わりますが、移動中、アラスカのマッキンレイ山の真上で史上最大の晴天乱気流に遭い、機体が真横になり800m落下、山頂がぐんぐん迫った時の恐怖、サハラ砂漠の十字路で何もない見通し完璧なところで、運転手の先に通過しようという単なる競争心でスピード

を両者が上げ、前の車が粉々になった事故。この種類の話は、無限にあり、それがいろんな既視感になり、私のリスクマネージメントのベースになっています。今になると、よく生きているなと、しみじみ思うのが、実感です。

横道から、2001，9，11に戻ります。

発生から、1時間、マッハッタンは、一般の車は通行禁止となり、無数のパトカーと救急車のみが走り、あの華やかな5番街から、走る車が1台も無く、ただ南の現場の方から無言で歩いて逃避してきた人たちが歩いているだけの無音の異様な静けさが支配する街が数日続きました。

ご参考までに、当日即刻、いろんな経験を経てきた小生の選択した行動を記しますと、

落ち着くのに、最低5日間は必要と仮定して、食と住の確保に動き、まず、ホテルのフロントで7日間の宿泊の延長手配を確定し、次に、デリカテッセンの食料品店を5—6軒走り回り、パンと水　3人、5日分を両手に山のように確保しました。

その後、JALの事務所に行き、再開1番機に乗れるようお願いして、手続きだけは済ませました。これで、最低限の確保が出来たのでホテルに帰ると、同行の電力会社のお二人が、1階フロアーの床にすわって「本社に連絡が取れ、副社長から『片山さんが一緒ならあの人は、修羅場を何回も経験しているから大丈夫！金魚の糞のように離れるな』と言われましたのでよろしく。また、出身地の新聞に行方不明、事件に巻き込まれたか？と大きな記事になっている、早く帰れと家族から言われました」とのこと。

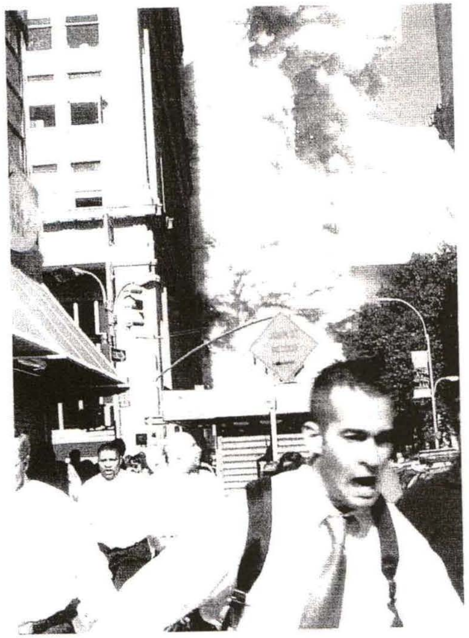
「努力はするが、NYから出る橋、空港も封鎖では、打つ手はありません」と説明し、こういう時は、「果報は寝て待て、人事を尽くして天命を待つ　で行きましょう」と説明しました。

今回、さすがアメリカは、早い、と思ったのは、2日目から、

We shall overcome！ We stood still！
Remember the Hero！ We still have energy！

などの標語がいろいろな場所に立ち、活気がみるみる戻ってきたことです。

我々は、5日目、1番機の噂が伝わり、空港のカウンターに殺到した日本人、千人以上の中から幸運にも席が確保でき、無事に成田に帰着し、私もほっとしました。

それから後も何度かNYに行き、好きだったブルックリン橋の対岸のレストランからマンハッタンを眺め、TWIN TOWER が欠けているのを見ると、自分史の一部が欠落したな！と思いますし、テロの残酷さをいつも考えます。

書けないことも、多くあり自分でも不満ですが、このへんで、私の経験した、2001，9，11の筆を置きます。